
月 刊

MéLange

Vol.122



2017.04.30

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.121 2017.04.30

「月刊めらんじゅ」編集部

詩 & 俳句

復活詠 (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 04
 ミラノの朝 ……………北岡武司 05
 夢の名残り ……………有時秀記 06
 お茶／テレビ ……………中嶋康雄 07
 鳥はみている ……………大西久代 08
 郵便的、……………中堂けいこ 09
 ロルカよ、ロルカよのロマンセ F・G・Lを愛する人々へ……………福田知子 10
 背山 ……………大橋愛由等 12
 一日の理由 (ルバイヤート風) 29-34 ……………大西隆志 13
 shell (ことに) なるだろうー明石公園にて ……………高谷和幸 14
 山の話 ……………富哲世 15

第5回日本・韓国・在日コリアン詩人共同ユン・ドンジュ生誕100年記念詩祭

朗読詩③／雪と花と空と詩——詩人 尹東柱に ……………福田知子 11

連載／詩評・エッセイ

言の次第「またまた難しい質問ですね。」……………富哲世 03
 神戸詞あしび111「元牧師の第三の人生 口伝の奄美の物語」……………大橋愛由等 16

編集部だより★41／「がっかり」がつづく。他者は自己の延長ではないし、ましてわたしは独裁者ではないのだから、私の思い通りにならないことは分かっているつもり。つもりだけど、言葉がつまる出来事がつづく。身の置き所がなくなってしまう。／「第二次朝鮮戦争」の危機が迫っている。1895年に始まった日清戦争も主戦場は朝鮮半島だった。今回の北朝鮮と米国との緊張関係に、大統領選挙真っ最中の韓国の影は薄い。朝鮮半島の帰趨は今世紀になっても軍事大国の思惑によって決まろうとしている。／表紙の写真は、祖父・岸本邦巳が経営していた古書肆。元町本通にあった店舗の時のものだろう。山のようにつまれた本と本。いまの私の書齋=仕事部屋も似たようなものである。／第122回「Mélange」例会の読書会のチューターは、詩人で哲学者の北岡武司氏。語るテーマは、『徒然草』。どのような語り口で切り込んでいくのだろうか。楽しみである。／今号で掲載した富哲世氏の詩稿「山の話」、詩評「言の次第」が、富氏の詩誌「月刊めらんじゅ」における絶筆となりました。／表紙写真は、神戸の元町通りにあった祖父・岸本邦巳が経営していた古書肆の写真（大橋記）

言の次第

富哲世

◎またまた難しい質問ですね。

何かの共有のために詩が書かれるのは確か
 なのでしょうが、詩ができたときの喜びの共有
 というのは？やはり難しい課題でしょうか。詩
 はもつと波動的に他者に伝わっていくつてい
 うのかなあ。

詩の言葉もそうですが、一般的に個から発せ
 られることばというのには、共有される部分
 と、そこからどうしようもなくズレてしまう部
 分があります。これを謂わばことばの持つ宿命
 というものでしょうか。その食い違いもふくめ
 て詩の愉しみとできればいいのですが、それも
 また難しいところですよ。

貴女が詩をそうやって前向きに取り組もう
 としている限り、その悩みの行き方のままでい
 いと今はやっていけば間違いないと思います。
 この度もまた回答にならない回答でしたね。

◆復活詠

岩脇リーベル豊美

母に似た東独出身老女は綺麗ブロンド
 中性的印象で乗り込むヒトじろじろ見た
 御免ねゲッツエマネみたいに寝てしまった
 純粋な円は描けないひとりで大の字
 許し合う？殺し合う？プネウマたちの復活祭
 漣と地鳴りと復活のちに黙りこみ
 無言なの？要らないと言え愛なんて
 二十ライヴに惹かれたわたしは倍以上生きた
 デコルテの透けるリラなぜ衝撃的ピンク

マーメイドドレスどこかにあったと思う朝
 待つとメモ君花花しい春愁い
 手立てなく停車果てしなく大陸鉄道の夜
 ボン・ヴォヤーヂ車内放送鑑賞夫婦
 無時間の地平線両端歪む花林檎
 どう家に帰るか訊くと駱駝の真似
 生贄の血祭壇に注ぎ傷痕癒え
 爆発のスローモーション停戦の結び目
 イースターエッグ四角い部屋を空母色に
 野生チューリップ飾る映画の冒頭思い出し
 満員列車に隙間見つけて市民という概念
 パレスチナ祖父持つ女子にインタヴューされ

◆ミラノの朝

北岡武司

ロロロロ ロローニヤ
 ロローニヤ ロローニヤ
 夜が白んで霧うすくなり
 ニセアカシアの香りこく
 ミーニヨンも知らなかった
 ミーニヨンのふるさとよ
 ロロロロ ロローニヤ
 ロローニヤ ロローニヤ

小夜啼き鳥のさえずりは
 フルートの音のよう
 春の芽生えをうれしく奏で
 ロロロロ ロローニヤ
 ロローニヤ ロローニヤ
 裸のまゝのケヤキも
 枝 枝に若芽ほころばせ
 春の装いをはじめ
 ロロロロ ロローニヤ
 ロローニヤ ロローニヤ
 春だよ春 春がきたよ
 ミーニヨンのふるさとに
 春がきたよ

◆夢の名残り

有時秀記

「起きなさい」という懐かしい父の声が聞こえたのは夢の中である。その声とともに、丘にある竹林の中から一人の人が立ち上がり、一本の竹を杖にして丘から出てのしと歩きはじめ。杖の竹は非常に太いもので、竹の先がいくつかの鋭い爪になり、立ち上がった人は、その太い緑色の竹の爪を柔らかい地表面に突きたてながら、おもむろに歩を進める。歩き始めた人は、しかし顔の姿が見えず、肩から下だけの人体である。

この夢の中で歩き始めた人体の無意識の主は「わたし」らしいが、それを夢の中で見ている見えない眼差しがあり、それはもう一人の「わたし」であることは確かなことのようにだ。というよりも歩く人体の無意識の在りかがもう一人の「わたし」なのであろう。

歩く人は夢の中の領域が拡大しても肩から下だけしか姿が見えないで、顔は夢の領域から飛び出しているのか、または顔そのものが無いのかと想像される。歩きながら、この人体は竹の葉や丘の上に倒れた幾多の竹の破片を衣服のようにまとい、みずみずしい緑色の身体造形を自ら生み出している。

もう一人の「わたし」は、この夢の拡大していく領域を自由に感じて眺めることができるのだが、自身自身では自らには付帯していない身体と物の行方

を探しているかのようにである。

顔のない緑色の人体は夢の領域が拡大していくにつれて巨人のごとき人体となり、巨体となっても顔が無い言葉が発することができないので、なにごとかを表現したいときには巨体を震わせている。その震えによつてもう一人の「わたし」と意思疎通を図ろうとする。

二人の「わたし」が期せずして、同時にいれんする時がある。巨体の震動(この震動によつて身にもとう竹の葉から微かに緑素が分泌される)、及び見えない眼差し(この眼差しは意識の薄膜のようなものであり、無を付着させているのだが)、これらの二者の同時にいれんの時が、無意識の超越化が同期される(とき)である。この超越化(あるいは無意識の薄明化と二人のわたしは思っているのだが、)によつて、夢の中にも鮮やかな(意識)と覚しいものが現わになる。

この無意識の薄明化のち、夢の中の或る領域に小さな緑地が発見され、原因不明の不治の病で心労に打ちひしがれた少女がその場に眠っているのが見出される。

もう一人の「わたし」の透視によれば、少女は遍歴を繰り返して、自らの調和能力や制御能力の不足から、いわゆる社会と名告る者たちから言われもなき疎外をされ、偏りに基づく誹謗をされてきた。いま一人の「わたし」は不遜な社会性とやらの蒙味には与しないで、その緑地の少女の存在を、顔の無い巨人の存在と同一の地平に見ることが出来る。もう一人の「わたし」は遍歴少女を疎外する蒙昧な社会性

とやらを圏外に追いやり、ただただ、遍歴に備わる(メタ存在)の同朋であると強く感じて眼差しは遍歴少女を守護する眼差しになる。

そのメタ存在を「感じる」瞬間に、巨体の緑色の異様かつ肉体的な美はけいれんし、もう一人の「わたし」の意識は巨人の「無い顔」にもメタ存在を感じる。それと共に、緑の地で疲弊し英気を養う遍歴少女は完全な回復、つまりはメタ存在の現前化を果たす夢中夢を見る。

巨人の「わたし」ともう一人の「わたし」、夢の中の夢で回復する遍歴少女、これらは、それぞれが夢から目覚めたのち、雲散霧消したが、これら夢の素因とも言える三者の奇跡の(一体化)が存在したことは確かなことである。

その証左として、夢の中の緑地にも、夢が覚めたのちの緑地のあとにも、小さな理想境のような場所に太い竹が一本、天空に向けたトータムボールのように屹立していたのである。そのトータムボールの上部には二人の「わたし」と遍歴少女の結びつきを現わす顔が、少女を抱くヤヌスのような美しい形で彫り込まれている。そのトータムボールの中心にはトータムボールをぐるりと回る鏡が貼られて周囲の光景が反映し、ときどきの季節を映している。

そして優しげな母の声そのものである「風の音」が「起きなさい」「目覚めなさい」「眠りなさい」という事態を示す三言語を秘境に響く音楽のように繰り返して、トータムボールを微かに震わせているのである。

◆お茶

中嶋 康雄

お茶を捨てる

ただの窪みにお茶溜まりができ
古い筆記用具が群がった

筆記用具の群れに祖母に貫った
みみかきが混じっていた

「お茶を捨てるなど
なんて罰当りな」

叫んだ後

みみかきはお経を唱え始めた

お経はわんわん共鳴し

お茶がみるみるうちに元気を取り戻し

お茶菓子などをとつつかまえて

淫靡な行いに励んだ

冷蔵庫の扉がボタンと開き

しわしわのレタスが転がり出て

雄叫びを上げ

冷たい葉をふるわした

葉からつまらない色の蝶が飛びだし

しばらくの間

淫靡な行いを続けるお茶を吸った

みみかきが蝶を手当たり次第に畳み始め

畳み終わると

ほんとうにいやいや勉強するレタスに

困難な問題を出題した

レタスが頭をかかえて

「まだ習っていません」

と解答行為を放棄した

「そんな頭の悪いやつは

頭から石油でもかぶって死んでしまえ」

みみかきは怒って水源地に行つてしまった

水源地は山で

静かな場所

「淡水エビがいる」

と思つていたらしいが

ただの住宅地になつていた

ローンが温暖化ガスを吐きながら

泳ぎまわっていた

利息のうんちも垂れていた

お茶が相変わらず不機嫌に飲まれていた

いつの間にか

ベットポトルに閉じこめられて

数種の依存症を併発し

窒息しそうになつてた

「なにか悪戯でもしたのかい」

とキャップを開けてやりながら

みみかきがお茶にきくので

お茶が

「だまされました」

へらへらへら答えた

「うそをつくんじやないよ」

みみかきが冷凍ブラックタイガーを投げつけた

逃げまどうお茶どもに命中した

昏倒したお茶がドボドボかかると

海老の黒い縞模様がほどけ

曇つた空に舞い上がり

懐かしい

懐かしい

チャイムが聞こえた

ゾロゾロと行列をつくつて

向かう先は

ただの薄暗がりだった

◆テレビ

中嶋 康雄

と投げやりな調子で言った

どいつもこいつも

どぶにただぶかぶかと

浮いているだけだった

お開きにしたところで

なにが変わるわけもなく

ただ浮いているだけだろう

「気持ちが変わる」

ときれいごとを言うやつは

得体の知れない魚に食われて

消えてしまった

邪な横断歩道を

やつとのことで渡りきると

卑怯な雪が降ってきた

これから行く面接会場は

人工頭脳が経営する会社が

ブースを並べているらしい

面接官は端末だ

数秒で採用の可否を言い渡すらしい

「残念ながら・・・」

と数秒ごとに告げられる

生身のことなどどうでもいいらしい

どぶに帰って

ぶかぶかと浮きなおす掟は

日ごと厳しくなるばかり

根掘り葉掘りは容赦なく

「死んでしまえばよいのだ」

どぶの吏員が言い放つ

本音を隠す風潮も近頃はなくなった

ただ一心にぶかぶかと浮いている

「いっせ沈んでしまえば・・・」

卑屈なとなりのやつはつぶやくが

テレビをみていることにして

聞こえないふりをする

◆鳥はみている

大西久代

大きな翼を翻し 鳥が
わたしの腕に重く止まった
どこの空を飛来してきたか
翼の内部に 大いなる意思を隠し
島の突端から海を見やると
人を満載したボートが荒波の中
海辺に打ちあげられる
恐怖から安堵へと変遷を潜りぬけた顔が
降りてくる
鋭い眼光で鳥はみている

※

一瞬一瞬こそ明日への手綱だ
玉蜀黍畑を這いつくばり
泥だらけの体をさらに前へ
汗は私の内部にこそ浸みわたる

私たちは共有できる その希求があれば
未来は今より建設的だと思おう
私の生が裂けているなどと誰が言えよう
闇と屈辱は今に拓かれる
私の心臓は打ちなる この有刺鉄線の破れ目から
大空を悠々とゆく鳥がみえる

※

パン籠をもち彼らが行こうとする
街の入り口に立つ
擲する人の顔が窓から覗く
喉を掻き切られた馬が街を疾走する
ヤグルマギクを蹴散らして
ぬかるみに飛び散る血の跡
やがて鳥は凍てつく空へ
見えない線を飢えた時がひいていく

※

荒れ野に蹲る疵ついた体
汚れた空に拡がる焦土
薄闇の地上を照射する鳥の眼
清晨に向かう自由が
世界を鼓舞する

◆郵便的、

中堂けいこ

横野の紙に文字を書く。えんえんと書く。ときおり厚ぼったい綴じ束を開く。わたしは書きすぎたり書き足りなかつたりするのだが、その加減がわからずますます書き募るのだ。部屋のか隅の机にかぶさっていると、昼の光が背に差してくる。紙はずんずん増えて筆圧でこわついているが、紙の四隅がひどく気になる。文字の段揃えがいびつになつて何かが見出しそうになつている。

紙束をきれいにたたみ、同じ材質の袋に平らに入れる。外側に宛先の人の名を書く。外に出て坂道を下る。坂の途中に赤いボックスがある。よく探さないとわからないところに投入口が切られていた。わたしは紙の包みをその口に入れる。入れようとする時、まさに包みを落とし込むばかりなのだが、バネ仕掛けの投入口の蓋を手の甲で押しながら、わたしはそれらの紙束に書き込んだ文字が多すぎるのではないか、あるいはもつと大切な文字が書かれなかつたのではないか、その過不足の具合は、すでに書き終えてしまった今、宛先の人もまたすでに書かれていない過不足を補えずに差し出すのではないか。投入口に入れた手の親指と人差し指がはなれず、暗いボックスの中はひんやりとして底なしのようにおもえた。手でさぐつた途端、包みは指を離れボックスの底に落ちていった。乾いた音がしてわたしは手を引いた。

帰り道、うしろから何かがかめかみを掠めた。紙飛行機だった。丁寧に折りこまれた白い紙飛行機だった。斜光をあびて影を際立たせ、いくつもいくつも飛んでくる。わたしのうしろからわたしの行く方向へ。後頭部に当たるものもある。道のわきの溝にいくつか落ちていた。子どもが捕虫網を振っている。紙飛行機を探ろうとしているのだろうか。子どもが頭をあげて、これはトンボだよ、といった。そうかトンボなのか。わたしはふり返らなかつた。

◆ ロルカよ、ロルカよのロマンセ

F・G・Lを愛する人々へ

福田知子

ちっちゃな坊やは叫んだ！

—月よ お逃げよ、月よ、月*

坊やは忘れていた

月をじつとみつめる子どもは

死の世界に連れていかれるつていう

古くからの言い伝え

…坊やよ お逃げよ、お逃げよ、坊や

ちっちゃな坊やは魅せられた

鍛冶場にやって来た白い月に

錫の乳房を露にした月のダンスに

—月よ お逃げよ、月よ、月

あなたの白い心臓が

指輪や首飾りになっちゃう…

だってジプシーたちは金属細工の名手だから

ジプシーたちが鍛冶場についたとき

坊やは月に手を引かれ

誰もが手の届かない場所に…

…ロルカよ お逃げよ、お逃げよ、ロルカ

だともうそこにロルカはいなかった

何と梟の歌うこと、

アイ 何と木の中で歌うこと！*

*「—月よ お逃げよ、月よ、月」「何と梟の歌うこと、ア

—イ 何と木の中で歌うこと！」は、ガルシア・ロルカ『ジ

プシー歌集』「月よ、月よのロマンセ」から引用。

第5回 日本・韓国・在日コリアン詩人共同ユニ・ドンジュ生誕百年記念集会 朗読作品

** 雪と花と空と詩^{ことば}

—詩人 尹東柱に

福田知子

荒れ狂う雪

突き刺さる雪

かの青い空は遠く

閉じ込められ追い詰められた

罅の白

不明な痛みを耐えているのだ

詩人の魂は鎮まっではない

この国の主治医は未だに彼の病がわからない

空も風も星もそこにあるというのに

白の罅りに言葉は奪われた

如何ともしがたい屈辱

しかし言葉は白の罅りをうらがえし

雪風の中

天に天にと光を穿つ

屋根は蒼く濡れ

そこかしこ淋しい光に照らされ

地図はもう降りしだく雪に蔽われることはない

ふわふわと去っていくものに心添わせるひとよ
嵐に吹き飛ばされて積もることはもうない

詩人よ

きょうほどのあたり

ひとの心のどのあたり

詩人が去った跡には花が咲くという

その花を雪の中に見つけては拾いあつめる

それは吊いの仕草だ

つきせぬ泉のにぎわいだ

そうして花を探していると

胸の中に声が流れてくる

—死にゆくすべての人たちに
黒い服をお着せなさい。—生きゆくすべての人たちに
白い服をお着せなさい。*

星を歌う風のひと葉

あるいは金盞花かもしれない

蒼い陽射しの中にひらく

コトバの花

毒とともに
ラッパの音とともに

*尹東柱「夜明けが来るまで」(『空と風と星と詩』)より

◆ 背山

大橋愛由等

石柱のある家の前に 立っているぼくは ところが白の通り道であることを分かっていながら 一通の伝言を伝えられないまま しどけなく立ちつづけ このまま去ってしまうのか もうすこし石柱にとどまるのか 尋ねる風たちも行方不明で 裸木の肌をさすために戻ってもいいのかもしれない 春の悲しみを胚胎している蕾をめでるために後ずさろうか 月夜だけに語られる詩語を蒐めたあのひとにもういちど逢いにいつてもいい 背山に遺したままの凍蝶の断念を採りに帰ろうか 大地を踏みしめるバイラオーラの溜息もいとおしい やはり手帖にはシアンで書かれた俗ラテン語が満たされていなくては 石柱は語らず語りかけももしない ぼくはここでいつまで昼ぎれの風を待っているのだろうか

◆ 一日の理由 (ルバイヤート風)

大西隆志

29 線路を跨ぐおりの諍いかしら、赤い身分証明書を提示す
縮み縮んでしまった木片の像は、削られマツチ箱におはす
アトリエに戻るのをやめるとカーテン越しの椅子でひねもす
われらの立ち振る舞いは口を開けたままのギャルソンを名指す

32 覚悟していたのか、どの川を渡ったのか、ルビコン
川、薬缶を口に啜えて水分補給をしながら炎天下で擾乱
門外漢なので打ち返していた球は、水煙、ワインともに門限
まで行方不明、此岸彼岸のちんちくりんの船頭による夜間問診

30 青い壺、青い車、青い家の戸
開けてみる、閉めてみる、世界がふるえていると
青い世界には四肢を破壊する悪意にみちた意図
標的になったのは小さな人、弱い人、外には届かない音

33 師匠と坂で別れ、振り返ると青い海のような葉が繁ってけなげ
つぶれるものもあり、つぶれぬものも入っているカバンを肩に掛け
訪ねてみた惘然の門から一步踏み出し家に帰るか、浮かぶ果樹を見上げ
黄昏に咲いている照柿は季節外れの花にふさわしい老いへの賭け

31 針金の切れ端、綱、麻屑の寓話を覆いつくす屋根
すべては分解に向かい、沈黙を抱えながら進む船
ことばを取り除かれ、長いホースで洗い流す羽根
来るのはパウロの弟子のルカによって蒔かれた種

34 たのしみは、星屑の下を口笛でも吹きながら、行きな
たのしみは、ひとりぼっちでいいよ、足許には花、花、花
たのしみは、一本の吊り橋のような暮らしをささえる綱
たのしみは、理念の柵の荷物を背負って運ぶ、そこに砂、畏

◆ shell (いとし) なるだろう

— 明石公園にて

高谷和幸

凍った雲がくだけて「ありのままを忘れる」気温が開花のしるべ(準空間的)となるだろう。その「卯月に未来の他者をつつむ嘘」に溶けた魚や時計が、この明石の池に shell のふたつのからに覆われた(なんでもきいてもかまわない)を置いて去った。かたちは作られ、海のさかいめに時間がそのかたちの破壊性を検査している？(わかりませんかその「ささやかな地異」を)姉(sister)の残す「かたみ」のあかしえぬものの総称を準空間の「それ」と言っても良いだろうか？。(がいとうすることばがみあたりませんか?)わたしはひとと、地に座り、見上げる「ろ」の窓が「つき」とわたしたちを視野に納めていると思われるのは「それ」がかくれた「それ」の shell としてまたわたしと「ひとの島を産む」かも知れないあわい夢を残しているのだろうか？長い間(そのあいだもわたしはほろびました)。かたちを得て、震える時間がその破壊性をあらわにするのはひととわたしたちのもとにあるもの「それ」。「人の心を知るとは…人の心とは」(プログラムがブラス化しているのでは?) 記憶「その夜識ったエリーザベトの物語りを習った」を散らばってひとり待つことをなぜ覚えたかも、置き去りにした公園で。

◆ 山の話

富 哲世

木漏れから優しいお日様の脅迫が零れる笹藪土手したの清流がちりちりと流れてくる木橋を通っている

つんと笹藪から顔を出した虎が「があおー、水馬赤いなあいうえお 浮藻にこえびもおよいでる、おれは人食いトラだがあおーがあおー」と泣いた
おお、そんなに嘆かずともよいものを

白魚の歌を聴きたい白魚の歌を聴きたいみんな穴蔵の奥でちぢこまっっているだけじゃないか
アマデウス モーツァルト 作 歌劇「白魚の歌」
そんなものは知らないんだけど
うたはキラキラと鳴りわたっていた

流れ来た一匹のしらうおが頭を下駄に踏まれておかしくなった

マーくん神の子ふしきな子隣人代表トミテツヨ

これでまた

夢がつづけられるよ

驢馬に紅いりんごと

熱いうんこもあげられるよ

「五十音」を模ねて

テープを止めそんな風に思った

夕愁の染み渡る眩い青空の中

そしてすべて消えてしまっていた

つたう? まいったなあ

バーバラ一家の三代の歴史と

八ヶ岳土田山の72年の記録の一切が

雪に流されてしまった

遺された息子の消息もいまではわからない

土田の濡れた土の中から

生木彫りのような腕が這いのぼる

うた 神戸詞あしび

111-2017.04.30 大橋愛由等



元正章牧師（写真右）と友人

元正章牧師（写真右）と友人。二人で会うことになった。持参した日本酒の一升瓶を呑んだ。肴もなかった。ひたすら呑み語りつづけた。生き残ったことは語り続けることであった。たがいに生まれ育った神戸の人間であることを強く意識して生きてきたという自

負があつた。灘区（元氏）と東灘区（私）の互いの家は無事だ。たがいにけが人もない。元正章牧師（写真右）と友人。二人で会うことになった。持参した日本酒の一升瓶を呑んだ。肴もなかった。ひたすら呑み語りつづけた。生き残ったことは語り続けることであった。たがいに生まれ育った神戸の人間であることを強く意識して生きてきたという自

元牧師の第三の人生 口伝えの奄美の物語

奄美の郷土会は、単に故郷を同じくするものの親睦団体以上の機能を有している。それは奄美の記憶を継承する装置であるということだ。奄美には奄美ならではの歴史認識がある。北に薩摩、南に琉球、東に沖縄という強烈な文化・経済・社会・軍勢力をもった強国に挟まれ翻弄されてきたのが奄美である。その地政学位置が奄美の歴史と社会、文化を形成してきた。

奄美のひとたちの記憶（その口誦世界）は必ずしも歴史的事実ではない。むしろ民族物語といつてしまった方がいいのかもしれない。大切なことは口伝えで紡がれつづけてきたそのありよう（紡がれていること）なのである。

口伝えで語られる世界があることに注目したい。その継承されている民族物語は強い自足性があり、同時に異論を入り込ませないのだ。

▼三月二三日／元正章牧師と再会する。牧師にも定年があるようだ。勤めていた西宮市の甲子園二葉教会を70歳の定年でやめることになった。それ以降は全国に散らばる友人・知人をたずねる旅に出る予定で、両親の出身地である奄美に向かうと聞いていた。その地でわたしと会おうと約束していたのだ。ところがこの定年は厳格なものではなく、どこかの教会からお呼びがかかれば、引き続き牧師の職をつづけることができるということである。四月から島根県益田市の益田教会へ赴任することになった。

ところが、この益田という場所は神戸からそんなに簡単に行ける場所ではない。わたしと元牧師は気易くいつでもどこでも会える関係ではなくなってしまう。

元牧師との付き合いは永く浅くない。阪神・淡路大震災の時のことだった。まだ震災後の混乱で騒然としていた神戸市中央区の東遊園地

で二人で会うことになった。持参した日本酒の一升瓶を呑んだ。肴もなかった。ひたすら呑み語りつづけた。生き残ったことは語り続けることであった。たがいに生まれ育った神戸の人間であることを強く意識して生きてきたという自

ていない。灘区の高台にあつた元氏（その時はまだ牧師ではなかった）の家周辺は大きな被害ではなかったものの、東灘の拙宅周辺は家屋倒壊率90%以上の凄まじい生き地獄が展開していた。生き残った者は生き残ったことを何らかの形で日々かみしめないと、自分の生が保てなかった。生きていくことに震えていた。こんな時に二人で語り合ったことは一生忘れることはない。

▼四月一六日／関西奄美会という郷土会が発足して百年の記念式典がこの日に大阪で開催されていた。この式典にあわせて南海日日新聞（奄美で発行されている日刊紙）が特別紙面を制作することになり、久岡学記者から原稿依頼を受け一ページを任せられていた。そこで、わたしなりに郷土会の存在意義や、かつて調べた終戦後（1945年）から奄美の日本復帰（1953年）

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.122
神戸

2017年04月30日 通巻122号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)